

利用者と介助員の深い絆を知る

●原つる子

在さえ思えました。何軒かのお宅を訪問させていただき、皆さんが介助員の方々を心待ちにしていることを強く感じました。介助員の方々を見るなり身体全体で喜びを表現される方や、家族の方々、そして介助員の方々と一体となって挑戦をしている姿を見て感動をしたと思います。

家族の方だけではどうすることもできない事を毎週訪問をしてい

以前からボランティア活動に関心を寄せていました。でも思うだけで実際なにか行動をしているかというところ、何もしていませんでした。社協の新聞で体験学習があるとの事を読み挑戦してみようと参加しました。

短い期間の体験でしたが、実際に行動をしてみても介助される方々と介助員の方々のコミュニケーションがとても良いことに家族的存

ただける介助員の方々にどれだけの期待と信頼を寄せているのかを痛感したと思います。人間対人間の仕事ということ、相手の方の自立心を与えるだけでなく、自分自身にかたりなかつたものを短い期間ではありましたが、思いおこされたようにも思います。

ただ、まったく始めての体験で

したので、ホームヘルプの良い側面だけしか感じられず、その反面には大変なご苦勞もあることとあります。今回体験したことを、また感じたことを常に忘れず、私自身ボランティア活動に対し様々なことを学ばせていただいたの思いで、活動の一員として皆様のお役に、またお手伝いさせていただきます。と思います。

●ホームヘルプサービスってなあに
ホームヘルプサービスとは、ホームヘルパーがお宅にお伺いして、お年寄りや障害者の残された力を引き出し、少しでもご自身のことはご自分でできるよう援助するサービスです。
ホームヘルパーには、大きく分けて3つの役割があります。そのひとつが「家事援助サービス」です。利用者宅の掃除・洗濯・買い物のお手伝いなどを行っています。もうひとつが、「身体介護サービス」です。入浴や通院の介助などを行っています。そして三つ目が「相談サービス」です。最近では、介護型のサービス同様、相談サービスのようないメンタルサービスが増えていきます。



施設福祉と在宅福祉の違い知る

● 福永智賀江

二年前、県婦人労働部が主催する、横須賀・三浦地区介護技術講習会に参加させていただいた後、一年間美山ホームでボランティアをさせていただきました。

そんな折、在宅介護に関する体験学習があると聞きし、しかもその課程の中に、ハンディキャブ乗降の介助があるというので受講を決意したものです。もちろん、施設福祉と在宅福祉の比較をしてみたいという思いも、受講を決め

た動機の一つでした。

また、私自身、左半身マヒというハンディを抱えており、身体障害者手帳の四級を持っています。

さて、私が最初に訪問したのは四十才代で右マヒになってしまった女性のお宅でした。現在は、ご主人と二人暮らしのことです。看護婦さんとヘルパーさんが、機能回復訓練のため入浴させています。

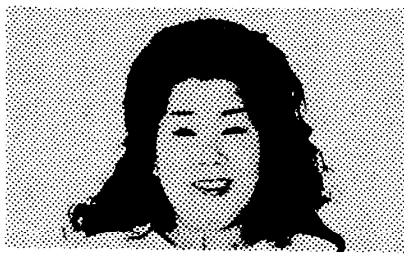
へたな機能訓練よりも、入浴の方が、リハビリ効果があるそうです。このお宅の場合は、本人の回復したいという強い意志と、家族の協力が一つになって、良い方向に向かっていているとのことでした。

ところで、私は彼女を見ていたから自然と涙が流れました。今から十数年前のこと、病院から帰宅したばかりの自分自身を思い出したからです。今でこそ私も障害を受け入れ自分のこととしていますし、また、同じようなハンディを抱え

る方に、自分自身の体験を話してあげられますが、私が右マヒとなったのは二十五才の出産時です。なかなか今のようには考えられませんでした。だから余計に、彼女の心境を察してしまい、涙が溢れたのです。

この体験学習を通じて、同じようなハンディを抱える方々に私の体験をお話しし、少しでもそうした人達のやる気を引き出せれば：そんなふうにならざるを得ない。また、在宅介護には、住み慣れた『わが家』で終末を迎えるのか、あるいは、『病院』や『施設』で人生を全うするのか、という重たいテーマを含んでいることを知らされました。

最後になりますが、ご指導いただきました皆さま、そして、私たちが快く受入れてくださった協会サービス利用者の方々にお礼申し上げます。



兎の心を持ちたい私

●松本洋子

私の大好きな方に、奈良薬師寺管長、高田好胤先生がいらっしゃる。今年、春も横浜のデパートまで講演に来られ、私も約三時間正座で法話を聞き「いかに生きるべきか」をさとされました。そして、今までの自分の歩んできた道を反省していた矢先、友人に今回の介助ボランティア体験学習に誘われたのです。体調も崩していましたが、四回の体験を終えた私は、我

がまま、好き勝手に過ごしてきた自分自身の人生を振り返り、何か自分にもできることがあるのではないのかと思えるようになりました。

私には自由に歩ける足があるのだから。高田先生の本の中に、インドの『月のうさぎ』の話があります。

インドの山の中に兎と狐と猿が仲良く暮していました。帝釈天といわれるインドの神が「あの三匹の中で、一番優しい心を持っているのは誰なのか試してみよう」と思い、おじいさんの姿になり「私は歩き過ぎてお腹がペコペコだ。何か美味しいものを見つけてご馳走してほしい」と言いました。三匹は心の優しい動物なので、狐は川で魚を捕り、猿は山で木の実を採り、おじいさんにすすめました。ところが兎はまだ帰ってきません。

しばらくしてしょんぼり帰ってきて「私には、何も取ることができませんでした。どうぞ私のこの体を御馳走いたします。これより他に、私がおじいさんに差し上げられるものは何もありません」といって自分の肉をおじいさんに食べさせてあげたということです。

自分の体をもって人のために尽くす。これは尊いことです。この尊い兎の心を皆に良く見えるようにしなければならぬと考えた神は、もとの姿になり、この兎を抱いて月の世界に連れていったそうです。

四回の体験を終えてふとこの話を思い出し、優しさのことを考えてみました。自分も少しでもこの兎のような優しい心に近づけるよう生きてみたいと思っております。最後にご一緒してくださいました皆様へ感謝します。

介助ボランティア体験学習と私

● 後藤 繁光 ——— ハンディキャブ運転員

今回の体験学習では、四人の方が私の受け持ちとなり、ハンディキャブ運行事業を体験しました。

皆さんそれぞれに活発な人、わりと穏やかな人、話上手な人と個性豊でしたが、こと奉仕と介護の精神は同一に強力であることが伺われました。

本市には、ハンディキャブが二台ありますが、リフトを操作する方法も、車椅子を固定する方法も違います。一応説明はしますが、いざ実際にやってみると、思うようにはできません。私が対象者を迎えに行っている間、懸命に練習したのですが、できずに考えこんでいました。また、対象者も身体の不自由な人、寝たきり老人、

痴呆性老人と多様ですが、同乗された受講者の皆さんはどう感じられたでしょうか。ただ可哀相と、

そうした方々に同情するだけでは何んにもなりません。おそらく、これから激増するであろうこうした方々のために、身を挺する覚悟

に燃えているのではないのでしょうか。車の走行中も付き添いや家族の方と話しを交わす人、私に対象者のことや運行時間などを質問する人もいました。「この車は、幾らぐらいするのでしょうか？」と言われた時には、恥ずかしながら私も戸惑ってしまいました。

この事業で苦勞するのは、対象者をベットから車椅子や移動式ベットに移すことと、車椅子などが

使用できない細い道や坂道、そして階段をハンディキャブまで搬送することです。今回の体験学習でも、二人の方がこうした状況に遭遇しましたが、二人とも汗を流しながら、懸命に移動介助にあたり

ました。

このような労苦も、終わって一息ついたときには、その感激はひとしおです。二人とも、とてもいい顔をしていました

まだ若い方のご意見を伺えたことは私にとっても勉強になりましたし、それに若い女性との同行は楽しみでした。

この体験学習を実効あるものとして、今後皆さんの益々のご活躍と発展を、お祈りします。

体験学習受講者との訪問を終えて

●熊木 正子——訪問看護婦

私は、日頃の訪問からボランティアの皆さんにはお世話になって

います。訪問先でもボランティア

の皆さんの心やさしく、あたたかい

態度はとても喜ばれています。

今回私は、十一月中旬に実施さ

れた「介助ボランティア体験学習」

に参加し、専門技術者の立場から

受講者の指導にあたりました。そ

の中で、清拭・温浴・車椅子散歩

の介助などを一緒にやっていただ

いたのです。中には散髪の得意な

方もいて、その方には、散髪をし

ていただきました。その手際良さと綺麗な仕上がりに、ケースも介護者もとても喜んでいました。

ベテランの方もいましたが、皆さん初めての訪問看護であり、緊張されていました。それでも皆さんの新鮮な気持ちと笑顔が、ケースにも介護者にも刺激になったようです。

事前の連絡なしに大勢で訪問してしまっただにもかかわらず、快く迎えてくださったご家庭の皆様ありがとうございます。

参加された皆さんが、今回の体験学習をきっかけにして、介助ボランティアをより身近なものと考え、ボランティア活動を継続してください。皆さんの訪問を私達も介護者も待っています。そして何よりもケース

が楽しみに待っています。一緒に頑張りましょう。

●訪問看護事業と今後の動向

訪問看護事業は市町村や地域の医師会、看護協会などが専門の看護職をおいた訪問看護ステーションを設け、病気やけがで寝たきりになった在宅の高齢者を定期的に訪問し看護サービスを行う制度です。

さて、統一ドイツには、要介護老人が二百十万人います。それを支えているのが、「ゾチアル・スタチオン」という訪問看護婦や介護士の基地です。旧西ドイツには、このゾチアル・スタチオンが約一千ヶ所を数えるそうです。

一方ゴールドプランを推進する日本でも、来春この方式が導入されることになりました。今国会で成立する老人保健法改正案はこの老人訪問看護制度が盛り込まれたわけです。ゾチアル・スタチオンをモデルにした訪問看護ステーションから家庭に看護婦を派遣し、かかった医療費の半分を老人保健制度で負担するのです。

介護の色彩の濃い費用を医療保険から支出するというのは画期的なことだといえるでしょう。